
スピリットサッカーV

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリットサッカーV

【Nコード】

N1306E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

男と男の一騎打ち、果たしてその真剣勝負の行方は？

男二人が向き合っていた。戦場の中でボールを巡り、互いに雌雄を決するのだ。

二人の目は真剣で真っ直ぐだった。負けたくないという気持ちと、ライバルと戦えるという楽しみの入り混じった、スポーツマンシップあふれる顔だ。

キックオフの時間は刻一刻と迫っている。二人の腕からは緊張が感じ取れる。汗が滲んだのか、二人は同時に拳を握ったり開いたりしている。

今、コートの中にはたくさん人間がいるが、その中でも意思を感じるのはこの二人だけだ。二人の後ろからは炎すら見える。

そして、いよいよ戦いの火蓋は切って落とされた。ボールを取った側の人間が、瞬時に手を伸ばした。

カッ。カッ。

部屋の中で何かを突く音が鳴っている。

少年が二人あぐらをかいて、その間に何かを置いて遊んでいる。サッカーゲームだ。

両脇にいくつかスティックの取っ手があって、それは引いたり押したりでき、それに合わせてゲームの中の選手が動く。

そして、スティックの取っ手を回すと、選手が瞬時に横を向いて、ボールを蹴ったような形になるわけだ。そして今、選手からシュートが放たれた。

しかし守備はそう簡単に敗れない。上手いこと左右に動かす用のスティックで選手を動かすと、そのシュートを止めた。

「あっ」

シュート側が悔しそうに声をあげたが、まだ戦いは続いていく。今度は守備していた側が攻めに転じて、次々に簡素なパスを繋いでいく。

「なあ」

カチカチ。

シュートしていた側の少年が、ふいに守備側だった少年に話しかける。

「なんだよニシオ」

「マキタ、お前^{かたおき}つてさ、片沖さんが好きなんだって」

「何言い出すんだよ」

「チャンス」

ニシオは、その隙について、マキタからボールを奪った。あーつとマキタが声をあげる。

「デメエ」

腹の立ったマキオは、サッカーゲームを持ち上げて少しグラグラと揺らした。

「おいおい、それはないだろう。レッドカード級の反則だ」

「ちっ」

舌打ちしながら、マキタはまた守備に戻る。そして、ボールを持った選手を上手く囲んでから、そのボールを奪い取った。

ニシオは悔しそうにしてサッカーのグラウンドをバシツと殴った。それは反則だとマキタに窘められて、仕方なくニシオは近くにあった幼年ホップという雑誌を叩き付ける。

「小細工してないでさ……マキタ、本当はどうなんだよ」

「ちげえーよ。告られたけど俺がフツたんだ。」

「お前、俺なんて告られたこともないのに。なんでそんなことしたんだよ」

カッ。カッ。

「だって俺は……俺の好きな奴は」

トントン。と、部屋をノックする音が聞こえた。どうぞ、とニシオが言うと、中に女の子がお茶を持って入ってきた。

「お兄^にい、マキタくん。お茶」

「気がきくな。貴子^{タカコ}」

「母さんが小遣いくれるっていうから」

カッ。カッ。

「何やってるの？」

「サッカーゲーム。懐かしいから出してきた」

「ダサッ。キモッ」

「シネッ！」

ニシオがそういうと、貴子は逃げるようにして部屋から出た。ブツブツと文句を言っていると、ふいにマキタの手が止まっていることに気づいた。

「どうしたの？」

「いや……」

「まさか、お前……」

「……なんていうかさあ」

「ロリコンかよ！ アイツ今年小学校入学したんだぜ？ 俺達と五歳差だぜ？ 五歳差」

「いいじゃんか。六十歳の俳優が二十歳の女の人と結婚したって、俺聞いたし」

カチカチ。

「ヨクネーよ！ ましてや兄の居る前でそんな、良い度胸だな、おいつ」

真ん中の選手が強烈なシュートを放った。しかしマキタに隙は無い。ナイスセーブでそれを止めた。

「妹俺にくれよ」

「そんなの俺が決められるかよ。確かにウザイけどさ、忘れ物した時とか金借りる時とか役に立つしさあ」

「お前そんなことに貴子ちゃん使ってたのか！」

キレたマキタは、強烈なシュートを逆に放って、ニシオのゴールにぶちこんだ。

「アーーー……」

「アー、じゃねーよ。俺がそんなの許さないぞ」

「うるせー。人の家庭事情に口出しするな」

と苛立った声でニシオは左側の選手に力一杯を蹴らせて、上手く飛んでいったところで右側の選手にシュートを決めさせた。今度は止められなかった。

「ちょっと待てよ。今のはナシだろ」

「いいんだよ。お前が油断してるのが悪いんだろ。それよりお前の愛しの貴子が持ってきたお茶飲めよ。温くなるぞ」

「ああ、そうだな」

といって、茶をマキタは啜り始めた。とても幸せそうにしている、ニシオは鳥肌が立った。

「良い冥土の土産になった」

「は？ 何言ってるのお前」

「あつ。しまった、つい口が滑った」

「お前……貴子に惚れて馬鹿になったか？」

といってニシオが嫌な顔をした。すると、マキタは立ち上がって、悲しそうな声で語り始めた。

「実は俺、ここに来る途中で交通事故にあって死んだんだよ」

「……へ？」

「でも、お前との約束も果たさないとけないし、貴子ちゃんの顔も見たかったから、天使に頼んで少しだけ魂の存在としてここに居させてもらったのさ」

「おい……本当に馬鹿言うなよ」

「死んだことをバラしたらその時点で終わり。予定より早いけど、そろそろお別れだ」

「待てよ！ お前に貸したゲームまだ返してもらってないんだぞ！」

ニシオも思わず立ち上がって彼を止めようとした。しかし、マキタの姿はどんどん薄くなっていく。

「母さんがしっかりしてくれるよ。じゃあな、元気でやれよ」

「マキタ！ 逝くなマキタ！」

彼の叫びも空しく、マキタはやがて霧のようになって、目の前か

ら消えてしまった。

がつくりとニシオは肩を落とした。なんだよ、そういうことなら、どうしてもっと慎重にならなかったんだよ。バカヤロウ。

ボタンッ。

涙が出そうになったニシオの後ろでまた、扉が開く音がした。また貴子がやってきたのだ。

「お兄いうるさい！ 宿題が出来ないでしょ？」

「だって、マキタが……マキタが」

泣きそうになりながら貴子の顔を見て、ニシオは驚いた。

貴子の横には、霊体として上半身だけになったマキタが、貴子の顔にチューしようとしていた。なんで見えるかはわからない。

でも、とりあえず腹が立ったので、ニシオはサッカーゲームを持ち上げ、叫びながら投げつけた。

「デメエ何してんだよ！」

「あうっ！」

貴子の顔にサッカーゲームはクリーンヒットした。そのショックで貴子は後ろの階段に吹き飛ばされて、足を踏み外した。

そしてそのまま転げ落ち、ドタバターという音を立てた後、首の骨が折れたパキッという音を響かせてから死んだ。

ニシオは、マキタと一緒に青白い顔で、階段を眺めていた。

(後書き)

あーあ。別に殺してしまうつもりはなかったのに、結局貴子が死んでしまった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1306e/>

スピリットサッカーV

2010年10月8日15時11分発行